

## 教養教育から専門教育へ —ヨーロッパ史の分野において—

齋藤 泰

### From General Education to Specialized Education

—On the European History—

Yasushi SAITO

#### はじめに

大学の教壇に立ってから、もう30数年になり、退職まで残すところ2年あまりである。その最後の務めではないが、教養教育でも、専門教育でも、大学教員として全力を尽くそうと、今まで以上に情熱を傾けて授業を行っているつもりだが、なぜか、講義・演習を終えて、研究室に戻ってくるごとに、毎回、正直に言って、虚脱感あるいはむなしさを感じないでもない。それはなぜなのか。もちろん、退職を間近にして、明らかに体力の限界あるいは、いわばマンネリに陥っている、という教える方に問題があるのかも知れない。それなりに情熱をもって、また様々な工夫を凝らして授業を進めても、なかなかしっくりいかない。学生に期待をかけ過ぎて、それだけ失望感も大きくなるのかも知れない。

しかし、どうも、それだけではなさそうだ。毎回、教室で学生を前にして感じるのは、学生が無関心なのと、何よりも学生の熱意が欠けるように思えてならない。学生が熱心に耳を傾けて、理解を深めてくれるよう期待するが、思うようにはいかない。そこには、明らかに受講する学生の方にも問題があるのではないか。出席をとらないと、平気で休む、あるいは分担を決めても、その場で切り抜けようとする。挙げ句の果てには、今でも出欠での代弁ではなく、代筆である。こうした学生の怠惰に、ただ言葉を失う。

振り返るに、カリキュラム改訂、授業評価あるいは成績評価また同僚評価、教養ゼミや総合ゼミなどの構想等、大学教育を推進する改革の嵐が全国の大学に押し寄せてから、もうかなりなる。大学教育の向上など、大学教員の口から出るなど、まず考えられなかった20年以前と比べると、隔世の感がある。大学内外から押し寄せている大学改革の渦中に晒されて、教員は様々な改革やシンポジウム、ワークショップに相変わらず振り舞わされているのが、現状だろう。それもこれも、学生のためを思っており、大学教育の質の向上を考えてのことである。それはそれで意義深いことで、今後とも、一層様々な試みが望まれる。

だが、学生の方には、相変わらず、消極性、無関心、あるいは居眠りや私語そして遅刻・欠席がなくなる。学生のあり方は基本的にあまり変わっていない。相も変わらず、安易さに流され、年々、勉学意欲に欠け、惰眠を貪っている学生が少なくない。大学教員の方は、否応なく改革の荒波にもまれていて、右往左往しているが、学生の方は、全くどこ吹く風だ。やや不適切な喩えを引き出すが、「笛吹けども踊らず」というのが、正直な心境なのである<sup>(1)</sup>。

こうした現実晒されると、改革とか、ワークショップは何を意味するのだろうか。これまた、正直、虚しさを感じない訳ではない。とはいえ、こうして落ち込んでもどうしようもないので、ここ

で自己を奮い立たせて、日々実践している授業に立ち返って、ここからもう一度建て直すしかない、と常日頃から思っている。毎年、担当している授業科目一つ一つ、大学教育の実際の進め方を率直に点検し、学生の知的好奇心を喚起する有効な授業方法を探り、同時に、教員の意向や熱意をより一層発信できる、毅然とした姿勢を学生に打ち出すようにするのも意味のないことではない。教養教育科目でも、専門教育科目でも、日頃、どのように授業を進めて来ているか。そこで、長年実践してきたヨーロッパ史の教育の実際について、今年度の開講科目に即して、以下、まとめて見よう。そして、そこから、いくつかの今後の方向を再確認したい、と思う。

### 1. ヨーロッパ史授業の組み立て

大学教育では、研究と教育の実践を十分に踏まえながら、授業科目が組み立てられる。その際、私は、2つの基本方針をとっている。教養教育から専門教育への連続性と、大学4年間全体に目配りした学年次配当である。

まず、大学教育は、いかなる分野であろうとも、常に教養教育と専門教育との連携の下に進められる、と常に考えている。それは、組織としての連携ではなく、何よりも教員一人一人が、教養教育科目と専門教育科目を同時に担当し、しかも内容的に一貫したつながりを持たせることである。いかなる学問分野であれ、内容上、教養教育と専門教育との有機的な連携である<sup>(2)</sup>。

もう15年前になるが、「大学設置基準の大綱化」に伴って、旧教養部組織は解体し、私立大学を除いて、一般教育が全学で責任を負うシステムになった。これで、教養教育と専門教育の壁はなくなり、大学教育上、とても望ましい形態になったのではないか、と思う。それまでは、一般教育体制や教養部が独立した部局として組織され、教員も貼り付いていた。実際に教養部所属を経験した教員なら、語らずして、その異様な雰囲気忘れられないだろう。理念はともかく、実際においては、少なからず弊害をもたらしていたのは否定できない。同じ大学・学部内の教員でありながら、専門教育科目を担当できないとか、あるいは卒業研究を指導する機会がない。4年間にわたって大学教育を担うことなく、専ら一般教育科目だけで、1、

2年次学生向けで、しかも専門化に特化できず、総花的になりがちであった。何よりも、大学に職を得ていながら、日々積み重ねている研究成果を、専門科目として学生に提供できない、という何とも形容しがたい、もどかしさを感じた教員も少なくなかったろう。これが旧体制だった。それだけに、教養部解体、一般教育組織の解消と聞いたとき、奇妙な重圧からの一種の開放感のようなものを感じたのが、正直な気持ちではなかったろうか。今や、専門分野を問わず、教養教育科目と専門教育科目を同時に担当できる体制が定着し、基本的には、かつてのような教員の壁は取り払われ、自己の専門研究の成果を大学教育で十二分に活かせる時代になった。改めて、授業の組み立てとしては、教養教育科目と専門教育科目の連携が容易になった。教員側の教育上の体制が整ったので、あとは日々積み重ねている研究成果を少しでも授業に反映するかどうかは、授業の組み立て次第である。

授業科目を組み立てる際、次に留意しているのは、4年間、学生が、継続して、しかも系統的に履修出来るように、科目を学年別に適切に配置することある。1年次向けの教養教育科目からスタートして、卒業年度の学生も自由に履修できるように、授業科目を柔軟に組み立てる。高学年が、卒業論文または卒業研究の演習やゼミだけでなく、講義や文献講読も履修できるような環境を整え、同時に半ば強制的に勧める。2、3年次で履修しなかった講義はもちろん、外国語による文献講読も、3、4年次でも継続して履修するよう、機会あるごとに説得する。大学は4年間あるのだから、社会に出るまでの、いわば「モラトリアム」を有効に使わない手はない。いかに就職活動に奔走し、すでに卒業に要する単位数を満たしているとしても、否それだからこそ、関心の赴くまま自由に、3、4年次でも広く履修することである。2、3年次からの継続であれば、興味も持続できるし、さらなる勉強にも役立つ。その際、講義だけでなく、外国語の文献講読も続けて履修するメリットを説く。

実際の学年別配当は、表1の通りである。まず、「ヨーロッパ史」は、教養教育科目として、1年次で全学に開く。同じ教養教育科目である「イギリス史文献講読」は、2年次対象である。2年次

表1 ヨーロッパ史授業科目と学年次配当

授 業 科 目	学年次							
	1 年 前 期	1 年 後 期	2 年 前 期	2 年 後 期	3 年 前 期	3 年 後 期	4 年 前 期	4 年 後 期
ヨーロッパ史(2単位)	○		○					
イギリス史文献講読(2単位)			○		○			
ヨーロッパ文化史(2単位)			○		○		○	
ヨーロッパ史Ⅰ(2単位)				○		○		○
ヨーロッパ史文献講読Ⅰ(2単位)			○		○			
ヨーロッパ史文献講読Ⅱ(2単位)				○		○		
ヨーロッパ史文献講読Ⅲ(2単位)			○		○		○	
ヨーロッパ史文献講読Ⅳ(2単位)				○		○		○
ヨーロッパ史文献講読Ⅴ(2単位)			○		○		○	
ヨーロッパ史文献講読Ⅵ(2単位)				○		○		○
ヨーロッパ史演習(2単位)					○			
卒業研究指導ゼミ(2単位)						○		
卒業研究ゼミ(2単位)							○	

註：このほかに、文献講読の読み替え科目として、「ヨーロッパ史文献講読Ⅶ」(3, 4年次, 前期), 「ヨーロッパ史文献講読Ⅷ」(3, 4年次, 後期), 「ヨーロッパ史Ⅱ, Ⅲ」(3, 4年次, 前期), 「ヨーロッパ史Ⅳ, Ⅴ」(3, 4年次, 後期)を開講している。

からスタートする専門教育科目は、大きく講義、文献講読とゼミに3区分して、4年次まで自由に履修できる。「ヨーロッパ文化史」と「ヨーロッパ史Ⅰ」は、2年次に位置づけているが、もちろん、3, 4年次学生も履修できるし、積極的に受講するよう、いつも学生に勧める。「ヨーロッパ史文献講読」は、表1から分かる通り、2年次から4年次まで続けて履修できるようにしている。もちろん、3年次から始めても構わない。講読では、毎年同じテキストを繰り返し読むのではなく、読み終えたら、次のテキストに進み、学期、年度を越えて読み続ける。同じ文献講読を2, 3年間続けて受講する学生には、「ヨーロッパ史文献講読Ⅰ～Ⅷ」か「ヨーロッパ史Ⅰ～Ⅴ」のいずれかで単位認定する。いわば「読み替え」措置で対応する。英語での文献講読は、3年次までとして、2年次を優先するが、フランス語、ドイツ語での文献講読は、2年次から4年次まで、3年間、講読できるようにしている。「継続は力なり」を実感できると、機会あるごとに学生に諭す。

3年次からは、講義や文献講読と並行して、演習・ゼミに入る。これは、段階を踏んで進める。3年次前期の「ヨーロッパ史演習」から始まって、後期に「卒業研究指導ゼミ」となる。これを受け

て、4年次、「卒業研究ゼミ」に進み、着実に卒業研究の完成を目指して、1年間じっくりと研究指導を行う。この間でも、講義や文献講読は履修できる。こうして、ヨーロッパ史の分野において、学生が、4年間、自由にしかも系統的に履修できるように学年配当を整え、毎年、各学期、そして休講なしで、授業を進めて来ている。もちろん、隔年開講とか、閉講は全くない。

## 2. ヨーロッパ史授業の総点検

以上、教養教育と専門教育をセットにして、しかも4年間、継続して履修できるように工夫しながら、授業科目を組み立てている。そこで、3つの標語を掲げながら、3区分して、今年度開講した、すべてのヨーロッパ史授業科目を総点検しよう。その際、シラバスの要点を重点的に取り上げ、同時に、前期ですでに終了した授業については、「授業実施報告」を、後期からスタートした授業については、「授業経過報告」を公表しながら、総点検する、というスタイルを取りたい<sup>(3)</sup>。

その前に、過去7年間、毎年開設してきたヨーロッパ史授業科目の受講者数を掲げておく。表2の通り、教育文化学部への大幅な改組から今年度までの実数である。まず、毎年、開店休業なして来ていること、受講生数がそれほど極端に変動していないのを見て取れよう。講義では、30人～80人であり、ほぼ妥当な人数であろう。文献講読は、20人を最高限度にしており、ほぼその数内に収まっている。フランス語やドイツ語の「ヨーロッパ史文献講読」は、習熟度別クラスに分けているので、実際は、さらに少人数で、効率よく指導している。演習・ゼミは、やや多いが、学生相互の切磋琢磨を期待する意味では、活気があってよい。

### ①「スイス史・ブリテン史のノートを作成しよう！」

教養教育科目も、専門教育科目も、研究成果を積極的に反映させる、という意味で、スイス史を重点的に扱う。さらに、ヨーロッパ文化の「基底」を探るといふ狙いで、スイス史とともに、ブリテン文化史を主題にした、講義形態での授業を開設している。

授業方法として、「地図と図説から歴史を考える」という手法を取り、歴史地図や地形地図を多用し、絵や図表を掲げて、民族・文化の移動・交流を理解させる。歴史学が暗記物ではなく、多様

表2 ヨーロッパ史授業科目の受講者数

科 目	年 度								
	1998 年度	1999 年度	2000 年度	2001 年度	2002 年度	2003 年度	2004 年度	2005 年度	
ヨーロッパ史	27	41	45	46	40	65	75	78	
イギリス史文献講読		4	12	11	17	25	22	31	
ヨーロッパ文化史		58	54	55	80	80	67	60	
ヨーロッパ史Ⅰ		23	18	22	28	44	45	30	
ヨーロッパ史文献講読Ⅰ		18	7	16	8	16	19	15	
ヨーロッパ史文献講読Ⅱ		11	11	18	11	15	18	11	
ヨーロッパ史文献講読Ⅲ		7	7	5	14	12	15	23	
ヨーロッパ史文献講読Ⅳ		4	6	5	12	16	14	20	
ヨーロッパ史文献講読Ⅴ		8	5	22	18	27	18	24	
ヨーロッパ史文献講読Ⅵ		8	12	17	18	22	19	27	
ヨーロッパ史演習			4	8	11	11	12	8	
卒業研究指導ゼミ			3	9	6	8	11	5	
卒業研究ゼミ				3	7	6	6	11	

注：1998年度教育文化学部への改組以降のデータである。

な視点から考える学問であること実感させるためである。また、「ノートを作成する」ことを学生に義務づける。編別構成に従って、地図、図表を貼り付けさせながら、要点を書き込み、必要に応じてカラー彩色させる。そして、授業では、「大きい声で、聞き取り易い話し方」をすることを心掛けると共に、学生が教室に来て、聴講することを義務づけるために、毎回出席を取る。教員が分かり易い授業をするために最大限の努力を払っているのだから、学生の出席を強制してもよい、という考えである。この点で、学生に対する毅然たる姿勢を貫く。

○「ヨーロッパ史」（教養教育科目、前期、2単位） 教養教育科目、目的・主題別科目〔地域社会論〕の一つとして、全学部1年次学生に、毎年、開講している。シラバスにある通り、授業の目的は、『『スイス学のススメ』という講義題目で、ヨーロッパの小国スイスの歴史と文化について、スイスの古代から中世までの時代に限定して、多角的に論じる。近年の新しいヨーロッパ像を捉える一つの試みとして、多言語・多民族国家の重要性と、その国家形成を具体的に考え、ヨーロッパにおけるスイスの歴史的意義を探る。その際、スイス固有の地形と風土から、歴史と文化を考えるようにする』。その到達目標は、「ヨーロッパ史の新しい視点を紹介しながら、ヨーロッパとは何か、を総合的に考えたい。古代世界の意義、中世ヨーロッパ文化の意義を理解させ、ヨーロッパ文化の『基底』を探るきっかけにする。そのために、『連邦制』、『地域主義』、『多言語文化』そして『宗教

と国家の関係』を理解させる」。カリキュラム上の位置付けは、『『地域社会論』として、日本やアジアの歴史や文化と関連しており、これらの科目と関連させて履修するのも考えられる』。但し、こうシラバスに記したが、履修にあたっては、高等学校で世界史を履修していたか、受験科目として世界史を選択したかは、一切問わない。教養科目でも、専門科目でも、そうした履修上の前提条件は何も設定しない。このことは、ヨーロッパ史のすべての科目に該当する。

授業実施報告：教育文化学部29名、医学部3名、工学資源学部46名の学生が、カラフルなノートを作成しながら、「スイス学のススメ」の講義を受講した。欠席・遅刻・居眠り・私語厳禁。連続3回、通算4回理由のない欠席は、単位認定しない。休講なし。毎時間、出席を取り、ノート作成を義務づけた。こうした受講上の義務を、シラバスを配布して、周知徹底し、一定の約束事として厳命してから、授業はスタートした。本講の狙いは、次の3つである。◇ヘルヴェティア（「スイスにも、長い歴史がある」）、◇4つの国語（「スイスは、4つの言語の並存からなる」）、◇連邦制（「スイス連邦は、永久同盟からはじまる」）。1学期で、全員が永久保存版の「スイス史」ノートが見事に完成した。また、「スイス建国史跡めぐり」の私家版ビデオを放映し、スイスへの関心を喚起した<sup>(4)</sup>。

○「ヨーロッパ文化史」（専門教育科目、前期、2単位） 教育文化学部国際言語文化課程専門教育科目で、2年次以上の学生に、人文社会系の

概論として開講する。シラバスでの授業の目標は、「『ブリテン文化史入門』の題目で、イングランド、ウェールズ、スコットランドとアイルランドからなる『4つの国』、ブリテン諸島史の歴史と文化について、ケルト文化、ローマ文化、ゲルマン文化、キリスト教文化の相互関係から、文化史的考察を試みる」。授業の進め方は、「カラフルなノートを作りながら、講義形式で進める。『ブリテン文化史跡めぐり』（特製）のビデオ放映。毎回、講義終了直前、出席カードにいろいろな話題を書かせて、出席を取る。地図と絵を活用し、ノートを作成させながら、いかに世界史を教えるか、中学校『社会』、高等学校『世界史』教授法の実例を示す。はっきりと、大きい声で説明し、毎回、必ず時間内に終了する。70人前後の規模で、履修学生全員に対して、明快で、懇切丁寧な授業を実施する。この授業では、遅刻も欠席も許さない」。備考として、「『ブリテン史のノートを作ろう！』。専用ノートを用意すること。糊、ハサミ、カラーペンシルを持参すること。半年間、一度も休まず出席すると、誰にも自慢できる、すばらしい『ブリテン史』（永久保存版）ノートが完成する」と書き添え、この授業ならではの最大の特色をアピールする<sup>(5)</sup>。

授業実施報告：国際言語文化課程の専門教育科目として、また、社会科教職（中学社会または高校地歴）の西洋史概論として、教育文化学部60名の学生が履修し、「ブリテン文化史入門」のノートを作成しながら、受講した。第1回目のガイダンスで、全員にシラバスを配布し、受講上の義務を厳命した。無欠席・無遅刻、私語・居眠り厳禁、授業中使用した携帯電話没収。こうした約束事を学生と交わして、休講なしで、15回の授業を実施した。誰に見せても自慢できる、永久保存版の「ブリテン史ノート」が見事に完成した。本講の狙いは、次の3つである。◇「イギリス史」ではなく、「ブリテン史」である。◇初期ブリテン史は、「4つの国」の歴史である。◇聖俗未分離の関係から、歴史を読み解く。毎回出席を取り、カラフルなノートを作成しながら、「ブリテン諸島史」への関心を促した。「ブリテン文化史跡めぐり」の私家版ビデオを放映した。

○「ヨーロッパ史Ⅰ」（専門教育科目、後期、2単位） 国際言語文化課程欧米文化選修・国際

コミュニケーション選修専門科目として、2年次以上の学生に、「特殊講義」的授業として開講している。シラバスでの授業の目標は、「『スイス連邦の起源と伝説』の題目で、中世後期の神聖ローマ帝国において、中スイス地方の溪谷が、いかに原スイス永久同盟を盟約したか、国制史的考察を試みる。同時に、建国に関する文書史料と建国伝説から論ずる」。授業の進め方は、「カラフルなノートを作りながら、講義形式で進める。『スイス建国史跡めぐり』（特製）のビデオを放映する。毎回、講義終了直前、出席カードに、様々な話題を書かせて、出席を取る。はっきりと、大きい声で説明し、毎回、時間内に終了する。文書史料と建国伝説をつき合わせて、歴史を読み解く手法を試みる。地図と絵を活用し、ノートを作成させながら、いかに世界史を教えるか、中学校『社会』、高等学校『世界史』教授法の実例を示す。40人前後の規模で、履修学生全員に対して、明快で、懇切丁寧な授業を実施する。この授業では、遅刻も欠席も許さない」。備考として、「『スイス史のノートを作ろう！』。専用ノートを用意すること。糊、ハサミ、カラーペンシルを持参すること。半年間、一度も休まず出席すると、誰にも自慢できる、すばらしい『スイス史』（永久保存版）ノートが完成する」と書き添え、他では見られないユニークな授業を強調する。

授業経過報告：地図、絵、さらに文書史料と諸伝説をフルに活用して、カラフルなノートを作成しながら、休講なしで、講義している。今年度の履修学生は、教育文化学部2年次以上30名なので、明快で、懇切丁寧な説明が可能である。受講生数は、講義形態では、贅沢といってもよいほど、恵まれているので、全学生に話しかけ、理解できるよう十分に配慮可能である。学生の欠席もほとんどない。本講の狙いは、次の3点である。◇国家の基本形態は、連邦制である。◇共同体内における支配と「自治」。◇文書史料と諸伝説から、歴史を読み解く。毎回、出席カードに自由に書かせながら、出席を義務づける。私家版ビデオの「スイス建国史跡めぐり」を放映する。

## ②「外国語で歴史書を読もう！」

「ヨーロッパ史文献講読」は、毎年、英語、フランス語とドイツ語の講読として開講している。教養教育から専門教育まで開設しているのが、こ

の文献講読の狙いである。また、専門科目としては、3、4年次でも継続して履修できるように、「ヨーロッパ史Ⅰ～Ⅴ」とか、「ヨーロッパ史文献講読Ⅰ～Ⅷ」から相互に読み替えて単位認定している。こうして、4年次まで、外国語で歴史書をじっくりと読み続けることが出来る。熱意と辞書さえあれば、既習者、初学者を問わず、誰でも読めるようになり、あるいは読めるように指導している。学生の熱意が持続するように、めげずに、粘り強く指導していくのが、肝心である。選修を超えて、広く学生が履修するように勧めている。なお、フランス語、ドイツ語による「ヨーロッパ史文献講読」は、全国でもいまだあまり行われていない。ただ、問題は、分担しか予習して来ない学生の習癖に、正直、困り果てている。でも、めげないで、毎回出席を取り、誠心誠意、力を抜かないで、全力投球する。こうした状況だからこそ、一層この姿勢を崩さない、と肝に銘じている。<sup>(6)</sup>

○「イギリス史文献講読」(教養教育科目、前期、2単位) この文献講読だけは、教養教育科目である。教養教育の「国際言語科目」、つまり外国語科目に位置づけているのが、最大の特徴である。[英語]、[外国語表現法]、[外国語活用演習]、[日本語]と並んで、外国語科目の種類として[文献講読]が設定された。現在、6つの科目があり、その1つが「イギリス史文献講読」である。2年次学生が対象で、もちろん、全学に開放される。シラバスに掲げた授業の目的は、「イギリスの歴史書を読む。イギリス人が自国の歴史をいかに理解し、叙述しているか、辞書と世界史教科書を参考にしながら、原書を読む。イギリス人の書いた概説書を読んで、歴史の読み方、日本の歴史の描き方のための参考にし、また、イギリス史の面白さを知る」。その到達目標は、「英文を忠実に訳して、イギリス人の歴史の理解の仕方を学ぶ。日本語ではなく、英語で歴史を理解するのが目標である。同時に、正確な文法理解と、歴史知識をフルに活用して、厳密な英語文章の読み方の訓練と方法を学ばせる。英語辞書を頻繁に引くように指導する」。カリキュラム上の位置付けは、「英語の『外国語活用法』の科目と関連させて、外国語習得にも活用出来る」として、教養教育の外国語科目の1つである。何よりも、専門教育を教養教育で活かした好例として、多くの分野で、こうし

た文献講読の開設が望まれる。さらに、授業の進め方として、シラバスにこう記す。「プリントしたテキストを配布し、分担を割り当てて、内容・文法とも、正確に訳す。語学の効果的な教育のために、受講生は、最高20名までが望ましい。毎回、出席を取り、授業に参加することを最低限の義務とする。英語の苦手な学生は、読解に相当苦勞するので、遠慮願いたい。辞書を引きながら、イギリスの歴史を丹念に読む。このことを通して、イギリス史の理解が深まるだけでなく、英語の読解力もつく。受講を決めた学生は、15回休まず、出席すること。一度も休講なし。この授業のキャッチフレーズは、『英語で歴史書を読もう!』、『辞書を友達に!』である」。

授業実施報告：教育文化学部2、3年次30名、工学資源学部2年次1名と、イギリス史の概説書を英語で読む。イギリス人が自国史をいかに叙述しているか、がこの講読の狙いである。印象主義的な読み方ではなく、文法・内容とも厳密な読み方に徹した。今年度は、J.Randle, Understanding Britain. A History of the British People and their Culture. Oxford 1981.から、「中世イングランド」と「中世アイルランド、ウェールズとスコットランド」を読んだ。斬新な歴史解釈を学生が、最新の英文と共に、少しでも読みとれるように指導し、自分で英文を納得して読み、また、イギリス史の内容理解を少しでも深めるように、毎回出席することを義務づけた。効果的な外国語教育の受講者数は最大20名とする、と考えているので、履修者は多すぎる。初回、出席者全員にシラバスを配布し、厳しい履修上の義務(欠席・遅刻・居眠り・私語厳禁、不十分な分担訳は大きな減点等)を伝え、十分な検討を促したが、この人数でスタートした。厳しい履修義務を課しながらも、常に懇切丁寧な指導を心掛けた<sup>(7)</sup>。

○「ヨーロッパ史文献講読Ⅰ」(専門教育科目、前期、2単位) 国際言語文化課程欧米文化選修専門科目で、2年次以上の学生に開講している。シラバスでの授業の目標は、「『イギリス中世史文献講読』として、イギリスの歴史書を講読する。イギリス人がいかに自国の歴史を叙述しているか、イギリス史の概説書を丹念に読む。厳密な英語読解法の実例を示し、いかに英文を丁寧に読むことが大切か、を喚起することも、この講読の狙

いである」。授業の進め方は、「プリントしたテキストを配布し、分担を割り当て、内容・文法とも、一字一句疎かにしないで、原文を忠実に日本語に移し替えるように指導する。3、4年次でも、継続して受講出来るように、他の文献講読やヨーロッパ史専門科目で読み替えて単位認定する。国際コミュニケーション選修学生が受講したら、自由科目か専門科目として、単位認定する。必要に応じて、資料プリントを配布し、また『ブリテン文化史跡めぐり』の特製ビデオを放映する。毎回、出席を取る。もちろん、休講なし。やむを得ず、欠席する際には、メールで訳を送信すること。辛抱強く続けると、英語読解力が自然と身に付く。1学期2単位の外国語履修なので、『お得』な科目である。2、3年次学生の履修を望む。学生の積極性あるなしに関係なく、めげずに一貫した姿勢を貫く。20人以下の少人数規模で、履修学生全員に対して、懇切丁寧な、そして厳しい英文読解の効率的な授業を実施する。この授業では、遅刻も欠席も許さない」。備考として、「『外国語で歴史書を読もう！』。イギリス史原書を読む、学生参加型の1つの実例である。学生の積極性を大いに期待する。英語圏の奥の深さに招待しよう」と謳い、授業の特色を最大限にアピールするのを忘れない。

授業実施報告：15名（大学院国語科教育1年次1名、欧米文化選修3年次6名、2年次5名、日本アジア文化選修3年次3名）の学生と一緒に、昨年を引き続いて、R. Strong, The Story of Britain. London 1996. の中で、「黒死病」から「アザンクールの勝利」まで読む。学生が少しでも内容に関心を抱くように、関係資料を配付し、詳細な説明を加えながら、原文に忠実に読み進んだ。また、必要に応じて、ビデオを放映した。遅刻・欠席厳禁、もちろん休講なしで進め、この講読をいかに活かすかは、学生の自己責任である。幸い、今年度の受講学生は、とても真面目である。

○「ヨーロッパ史文献講読Ⅱ」（専門教育科目、後期、2単位） シラバスは、「ヨーロッパ史文献講読Ⅰ」と同じ。

授業経過報告：11名（大学院国語科教育1年次1名、欧米文化選修3年次7名、2年次3名）の学生と一緒に、前期を引き続いて、R. Strong, The Story of Britain. London 1996. の中で、バラ戦争

からエドワード4世・リチャード3世まで読む。斬新な歴史叙述に注目するように指導している。この後、D. Richards and A. D. Ellis, Medieval Britain. London 1974. から「キリスト教の再来」を取り上げ、アイオナ修道院を中心とする、ケルト・キリスト教の進展を、特製ビデオを併用しながら、読む。学生が少しでも内容に関心を抱くように、関係資料を配付し、詳細な説明を加えながら、原文に忠実に読む。遅刻・欠席厳禁、もちろん休講なしで進め、また、少人数なので、全受講生のために効率よく実施できる。

○「ヨーロッパ史文献講読Ⅲ」（専門教育科目、前期、2単位） 国際言語文化課程欧米文化選修専門教育科目で、2年次以上の学生に開講している。シラバスでの授業の目標は、「『フランス史文献講読』として、フランス語の歴史書を講読する。フランス人がいかに自国の歴史を叙述しているか、フランス史の概説書を丹念に読む。フランス語の読解力を確実に身につけさせるのを、同時に目標にしている。なお、2年次には、フランス語初級の復習から始める」。授業の進め方は、「プリントしたテキストを配布し、分担を割り当て、内容・文法とも、一字一句疎かにしないで、原文を忠実に日本語に移し替えるように指導する。2年次学生向けのクラス（文法復習とフランス語教科書の講読）、3、4年次向けの講読クラス（フランス史概説書の精読）。必要なら、初学者のためのフランス語学習を、『初学者のためのフランス語』で特訓するので、2年次以上のフランス語未履修者でも、大いに歓迎する。3、4年次でも、継続して受講出来るように、他の文献講読やヨーロッパ史専門科目で読み替えて単位認定する。国際コミュニケーション選修学生は、『ヨーロッパ史Ⅰ～Ⅴ』で読み替えするので、積極的に受講すること。1学期2単位の外国語履修なので、『お得』な科目である。毎回、出席を取る。もちろん、休講なし。やむを得ず、欠席する際には、メールで訳を送信すること。辛抱強く続けると、フランス語読解力が自然に身に付く。学生の積極性あるなしに関係なく、めげずに一貫した姿勢を貫く。20人以下の少人数規模で、履修学生全員に対して、懇切丁寧な、そして厳しいフランス語読解の効率的な授業を実施する。この授業では、遅刻も欠席も許さない」。備考として、「全国でもあまり例の

ないフランス語による『外国語で歴史書を読もう！』。学生参加型の良き実例の一つである。学生の積極性を大いに期待する。フランス語文献を読み、英語圏以外の世界へ眼を向けよう」と謳い、学生の関心を大いに引くように書き添えることを忘れない。

授業実施報告：3クラスに分けて、フランス語による歴史書を講読した。◆Aクラスでは、4名（欧米文化選修3年次2名、2年次1名、日本アジア文化選修2年次1名）に、私家版『初学者のためのフランス語』を配布して、初級文法から教えた。読解に不可欠な基本文法を、やさしい仏作文を通して、徹底的に習得させた。発音は、自主的に訓練させる。3年次2名はドイツ語既習であり、2年次学生は、朝鮮語を第2外国語としている。学生の希望でスタートしているので、その熱意は評価に値する。◆Bクラスでは、7名（欧米文化選修3年次2名、2年次2名、国際コミュニケーション選修3年次1名、2年次2名）に、同じ方法で基本文法の復習と、仏作文によって初級文法の確認という仕方で特訓した。3ヶ月の特訓の後、中級のフランス史教科書に進む。1年次での曖昧な文法理解から早く抜け出し、厳密な理解になるように、煩く基本文法の確認を指摘した。特に煩雑な動詞活用慣れるように指導する。◆Cクラスでは、12名（欧米文化選修4年次6名、3年次4名、国際コミュニケーション選修4年次2名）は、昨年に続いて、E. Lavissee, Histoire de France. Paris 1963.の原本をテキストに、「メロヴィンガー王朝」から中世フランスを読んだ。この後、昨年度後期に読み始めたフランス史概説書G. De B. De Sauvigny, Histoire de France. Paris 1977.の「カロリinger王朝」以降を読む。ほぼ受講生全員がフランス語読解に慣れてきているのが、回を重ねるごとに分かる。学生は、遅刻、欠席なく、積極的に授業に望んだ。願わくは、分担だけでなく、数頁に及ぶ緻密な予習を励行すること。ほとんどの学生は、2、3年間、フランス語文献講読を履修し続けているので、彼らの熱意を大いに評価したい。4名は、フランス語とドイツ語を同時に学んでいる。

○「ヨーロッパ史文献講読Ⅵ」（専門教育科目、後期、2単位） シラバスは、「ヨーロッパ史文献講読Ⅲ」と同じ。

授業経過報告：2クラスに分けて、フランス語によるフランス歴史書を講読している。◆Aクラスでは、10名（欧米文化選修3年次5名、2年次3名、国際コミュニケーション選修2年次2名）に、E. Lavissee, Histoire de France — extraits — 白水社、1992年、の後半を読み、読解力をつける。その後、その原本であるE. Lavissee, Histoire de France. Paris 1963.の中で、「ルネサンスと宗教改革」以降を読む。初学者、既習者とも回を重ねるにつれて、読解力の進展が目覚ましい。半年間で、フランス史概説書を本格的に読めるように、丁寧に指導している。来年度も継続して講読するよう、強く勧める。◆Bクラスでは、10名（欧米文化選修4年次5名、3年次3名、国際コミュニケーション選修4年次2名）は、昨年度後期に読み始めたフランス史概説書G. De B. De Sauvigny, Histoire de France. Paris 1977.の「帝国の分解」以降を読む。ほぼ受講生全員がフランス語読解に慣れている。学生は、遅刻、欠席なく、積極的に授業に望んでいる。ほとんどの学生は、2、3年間、フランス語文献講読を履修し続けているので、彼らの熱意を大いに評価したい。なお、3名は、フランス語とドイツ語を同時に学んでいる。ドイツ語同様、3、4年次も継続して履修するよう、勧めている。また、2年次には、来年度前期、初学者のためのフランス語学習を希望する学生が、もう数人出ている。

○「ヨーロッパ史文献講読Ⅴ」（専門教育科目、前期、2単位） 国際言語文化課程欧米文化選修専門教育科目で、2年次以上の学生に開講している。シラバスでの授業の目標は、「『スイス史文献講読』として、ドイツ語でスイスの歴史書を講読する。スイス人がいかに自国の歴史を叙述しているか、スイス史の概説書を丹念に読む。ドイツ語の読解力を確実に身につけさせるのを、同時に目標にしている。なお、2年次には、ドイツ語初級の復習から始める」。授業の進め方は、「プリントしたテキストを配布し、分担を割り当て、内容・文法とも、一字一句疎かにしないで、原文を忠実に日本語に移し替えるように、指導する。2年次学生向けのクラス（文法復習とドイツ語教科書の講読）、3、4年次向けの講読クラス（スイス史概説書の精読）。必要なら、『初学者のためのドイツ語』で特訓するので、2年次以上のドイツ



語未履修者でも、大いに歓迎する。3, 4年次でも、継続して受講出来るように、他の文献講読やヨーロッパ史専門科目で読み替えて、単位認定する。国際コミュニケーション選修学生は、『ヨーロッパ史Ⅰ～Ⅴ』で読み替えするので、積極的に受講すること。1学期2単位の外国語履修なので、『お得』な科目である。毎回、出席を取る。もちろん、休講なし。やむを得ず、欠席する際には、メールで訳を送信すること。辛抱強く続けると、ドイツ語読解力が自然に身に付く。学生の積極性あるなしに関係なく、めげずに一貫した姿勢を貫く。20人以下の少人数規模で、履修学生全員に対して、懇切丁寧な、そして厳しいドイツ語読解の効率的な授業を実施する。この授業では、遅刻も欠席も許さない。備考として、「全国でもあまり例のないドイツ語による『外国語で歴史書を読もう!』。学生参加型の良き実例の1つである。学生の積極性を大いに期待する。ドイツ語文献を読み、英語圏以外の世界へ眼を向けよう」と謳い、学生の関心を引くように書き添えることを、これまた忘れない。

授業実施報告：3クラスに分けて、ドイツ語による歴史書を講読した。◆Aクラスでは、欧米文化選修2年次6名に、ドイツ語初級文法を、私家版『初学者のためのドイツ語』を配布して、独作文をさせながら、2ヶ月、文法の特訓をした。読解に不可欠な基本文法の確認を繰り返し行い、この特訓後、中級のドイツ史教科書に進んだ。形容詞変化、人称代名詞等で、かなり曖昧な理解のままなので、簡単な独作文の訓練で、格変化に慣れるように、特に力を入れた。◆Bクラスは、欧米文化選修3年次8名と、昨年度後期から読み始めたF. Schaffer, Abriss der Schweizergeschichte. Frauenfeld u. Stuttgart 1982.のうち、第2章「対外政策の成功の時代(1231-1515年)」を読む。2年次から継続して受講しているので、学生の読解力が上達している。中には、4年次学生と同等の読解力で的確に訳読する学生もいる。もちろん、全員に、このまま、4年次でも続けるよう、指導する。◆Cクラスは、10名(大学院社会科教育1年次1名、欧米文化選修4年次9名)と、U. Im Hof, Vom Bundesbrief zur Bundesverfassung. Zürich 1948.のうち、第2部「13州同盟」第1章「宗教改革からフランス革

命まで」から読み始めた。専門用語や歴史的事実の知識不足に苦慮しているようだが、大学4年生としては、ドイツ語読解にはかなり慣れている。4年にわたって積み重ねた努力と熱意の賜物であろう。4年次3名は、フランス語の文献講読も履修している。

○「ヨーロッパ史文献講読Ⅵ」(専門教育科目、後期、2単位) シラバスは、「ヨーロッパ史文献講読Ⅴ」と同じ。

授業経過報告：2クラスに分けて、ドイツ語による歴史書を講読している。◆Aクラスは、15名(欧米文化選修3年次6名、2年次7名、国際コミュニケーション選修2年次1名、地域科学課程政策科学選修2年次1名)と、最初2回文法の基本復習の後、市販のドイツ史概説書 E. Zettl, Deutschland in Geschichte und Gegenwart. 郁文堂、1994年、の後半を読み、そのあと、前期に読み進んだF. Schaffer, Abriss der Schweizergeschichte. Frauenfeld u. Stuttgart 1982.のうち、第2部「対外政策の成功の時代(1231-1515年)」第10章「13州誓約同盟の国制」から読み続ける。2年次から継続して受講している3年次学生の読解力が上達している。前期に特訓した2年次学生には、まだ、文法的に曖昧な理解が見られるので、的確に訳すよう、徹底的に指導する。もちろん、全員に、このまま、3, 4年次でも続けるように、大いに奨励する。◆Bクラスは、12名(欧米文化選修4年次7名、3年次5名)と、U. Im Hof, Vom Bundesbrief zur Bundesverfassung. Zürich 1948.のうち、第2部「13州同盟」第3章「諸州の統治について」から読み始めている。大学生としては、ドイツ語読解にかなり慣れている。2年間にわたって積み重ねた努力の賜物である。4年次になっても、ドイツ語の原書を読む授業として、他の大学ではあまり経験できない、とても貴重なことである、と学生に勇気つけている。4年次2名と3年次1名は、2, 3年次に始めたフランス語初学者で、しかも、ドイツ語とともに、フランス語の文献講読も履修し続けてきた、とてもまじめな学生である。

### ③「レジュメを作成して、報告しよう!」

毎年、国際言語文化課程欧米文化選修の専門教育科目として、3年次学生を対象に、前期、「ヨーロッパ史演習」(2単位)を開講している。「ヨ

ヨーロッパ史演習」から、3年次後期開講の「卒業研究指導ゼミ」（2単位）を経て、4年次通年の「卒業研究ゼミ」（2単位）に進み、2年間にわたる着実な準備作業から卒業研究を完成する、というヨーロッパ史分野の専門教育の授業体系を立てている。

大学教育において、講義や文献講読と並んで、卒業研究（卒業論文）は大きな比重を占めており、そのために、学生の関心を自由に引き出しながら、卒業研究に集約出来るように、長期にわたってきめ細やかに指導することが不可欠である。そこで、他の分野より半年早く、3年次前期から、ヨーロッパ史に関するテーマをゼミ形式で討論し合えるようにする。「ヨーロッパ史演習」では、ヨーロッパ史に関心のある学生が、テーマを選び、その問題関心を各自掘り下げる。その結果、学生が自己の関心事を自由に選び、あるいは何度かテーマを変更することも出来るのと、何よりメリットなのは、3年次のうちから、レジュメに基づいて報告し、様々な意見や感想を述べ、自由に討論する機会が生まれることである。報告者はレジュメを自ら作成して、配布し、報告すること、報告を聞いた学生はレジュメに基づいて質疑応答することなど、初歩的なゼミ形式も身につける科目としても役立つ。それが、後期からの2つのゼミに有効に活かされる。いずれのゼミでも心がけているのは、学生に正面から向き合うようにしていることである。そして、演習の中でも、卒業研究の指導でも、全面的に学生への助力を惜しまない。最後まで面倒をみる<sup>(8)</sup>。

○「ヨーロッパ史演習」（専門教育科目、前期、2単位） 3年次前期、毎年開講している。シラバスでの授業の目標は、「『ヨーロッパ史演習Ⅰ』として、ヨーロッパの古代から現代までの歴史や文化から、いくつかのテーマを選定して、レジュメ付きで、報告し、討論する。ヨーロッパ史の諸相を考察し、ヨーロッパとは何か、を考える。原則上、卒業研究へのワンステップにしたい」。授業の概要と進め方は、「1. ガイダンス、2. テーマ選定調査、3. テーマ決定、4.～14. 各テーマの報告と討論、15. 総括。前もって、教員との綿密な打ち合わせの後、テーマを選定し、レジュメ（A4、両面コピー）を作成する。毎回2人、レジュメに基づいて、報告し、輪番制で決められ

た2人の質問者が感想・意見を述べ、討論する。テーマ選定は、学生の素朴な関心から自由に行われる。歴史学に限定せず、ヨーロッパに関する事項なら、何でも取り上げてよいように、きめ細かく指導する。大事なのは、学生の素朴な関心を引き出すことである。また、レジュメを作成し、報告する手法を学ぶ。『レジュメの作り方』、『研究報告の仕方』、報告者に対する『質疑応答の仕方』が自然に身に付くようにする。学生の興味・関心を最大限に引き出し、納得できる報告をすることが出来るように、懇切丁寧な指導体制を取る。無責任になりがちな『グループ発表』の方式を避け、個別報告に徹し、各自の固有の関心と能力を全面的に発揮できるように、きめ細かく配慮したゼミ形式を取る。熱意ある学生の参加を大いに期待する。〈学生参加型〉の授業である」。備考には、「『レジュメを作成して、報告しよう!』。大学本来の学生参加型の1つの実例で、学生の積極性を最大限に引き出す。もちろん、遅刻・欠席厳禁」と謳い、丁寧に指導しながらも、毅然たる態度も表明する。

授業実施報告：欧米文化選修4年次1名、3年次7名が、ヨーロッパ文化史に関するテーマを自由に選定し、レジュメを作成して、報告し、討論した。毎週2名の報告で、各2名が質問者となる。報告が一巡した後、毎回1人の個別報告に切り替え、全員の質疑応答で議論した。何よりも学生の素朴な関心を自由に引き出すようにしたので、テーマは、実に多岐に及ぶ。この演習は、同時にレジュメを作成し、報告するゼミ手法の修得も意図した。この演習によって、問題関心とテーマを模索し、確定した課題は、後期の「卒業研究指導ゼミ」と4年次の「卒業研究ゼミ」で一層掘り下げ、4年次末に、卒業研究として完成する。回を重ねると、発表の仕方は自然と慣れて来るが、問題は、発表後の討論である。プロモーターである教員の方が、事実関係の確認も含めて、質問の口火を切るが、どうしても内容まで立ち入って、深く聞きたくなる。そうすると、学生の質問と重複したり、時間の関係もあり、質問したりしなくてもよい雰囲気や学生に持たせるようだ。いつも心がけているつもりだが、一つの反省点である。

○「卒業研究指導ゼミ」（専門教育科目、後期、2単位） 3年次後期に開講している。シラバス

での授業の目標は、『『ヨーロッパ史演習Ⅱ』として、ヨーロッパの古代から現代までの歴史や文化から、テーマを選定して、レジュメ付きで、報告し、討論する。ヨーロッパ史の最新の研究傾向を念頭におきながら、ヨーロッパ史の諸相を地道に考察し、卒業研究への準備段階とする』。授業の概要と進め方は、「1. ガイダンス, 2. テーマの選定, 3. ~13. 各テーマの報告と討論, 14. 1月以降, 個別ゼミ(題目と構想の添削ゼミ), 15. 2月, 卒業研究題目と構想(1200字)を完成し、『西洋史』(研究室年報)第17号に掲載。前もって、教員との綿密な打ち合わせの後、テーマを選定し、レジュメ(A4, 両面コピー)を作成する。毎回1人、レジュメに基づいて報告し、全員が自由に質問し、感想・意見を述べる。最後に教員から今後の研究方向を提示する。休講なしで、毎週、教室でゼミを実施する。全員の報告が終了したら、打ち上げコンパで、ゼミの総括を行う。テーマ選定は、学生の素朴な関心から自由に行われる。歴史学に限定せず、ヨーロッパに関する事項なら、何でも取り上げてよいように、きめ細かく指導する。大事なものは、学生の素朴な関心を引き出すことである。卒業研究の準備段階として、徹底的に論点を深める。『ヨーロッパ史演習』の継続であるが、『ヨーロッパ史演習』未履修者も受け入れる。夏休みに入るまでに、前もって受講希望者は申し出ること。卒業研究の指導にあたっては、常に学生の素朴な関心を大切に、参考図書、卒業研究に要する図書を研究費で購入する。学生の関心をすくい上げ、同時に、近年の学界の動向を踏まえながら、テーマを選定させる。また、学生の自主性に任せるのではなく、半年間、ゼミを時間割通り開講することが、肝心だ。そうした実質的な指導体制を取ることによって、学生が卒業研究を目指して、地道に論点を深め、1年後、卒業研究を完成し、充実した大学生活を送ることになる。懇切丁寧な卒業研究指導を、毎週、時間通り実施し、学生の関心を引き出すように、教員として最大限に努力するので、熱意のある学生の積極的な履修を大いに期待する」。備考は、「ヨーロッパ史演習」と同じで、一貫した指導方針を表明する。

授業経過報告：欧米文化選修3年次4名と国際

コミュニケーション選修1名が、卒業研究の準備段階として、自己のテーマを絞り込み、卒業研究題目(仮題)を設定して、毎週1人、7~8枚の画像付きレジュメを作成している。報告に基づいて議論し、報告者との質疑応答の後、学生に自由な意見や感想を述べさせ、最後に、今後の研究方向を提示する。1月以降、個別ゼミに切り替え、題目と構想を作成し、2月、構想(1200字)を『西洋史』第17号に掲載する。ヨーロッパ史の最新の研究傾向に目配りし、斬新な視点から、題目を設定し、着実に研究課題を掘り下げ、実証的に論を展開するように、実質的な指導方法を貫く。12月には、総括を兼ねて「打ち上げコンパ」を行った。今年度は、1回に一人の報告で実施したので、内容・形式とも整ったレジュメで、発表と討論に十分な時間を割くことができた。

○「卒業研究ゼミ」(専門教育科目、通年、2単位) 4年次通年で開講される。シラバスでの授業の目標は、『『ヨーロッパ史演習Ⅲ』として、ヨーロッパの古代から現代までの歴史や文化から確定したテーマについて、レジュメ付きで、報告し、討論する。ヨーロッパ史の諸相を考察し、ヨーロッパとは何か、を考え、1年間の地道な研究から、卒業研究として集大成される』。授業の概要と進め方は、「1. ガイダンス, 2. 個別演習の実施, 4月3週目から3週間のローテーションで、7月末まで、9月から12月初めまで、毎週1回、個別ゼミ実施, 3. ~19. 研究室で個別に、各テーマの検討と報告(レジュメ作成の上、個別に報告、質疑), 20. 編別構成の確定(10月中旬), 中間報告会(10月下旬), 21. ~28. 卒研草稿添削(草稿→添削→修正)12月から1月末まで, 29. パソコンによる完成と提出(2006年1月31日), 30. 論集『西洋史』第17号への掲載と編集・発行(2月下旬)。4月21日まで卒業研究指導教官届, 12月1日から12月20日まで卒業研究題目届提出。個別演習では、時間厳守。変更の際には、事前に必ず連絡すること。連絡は、パソコンと携帯メールで、『卒研連絡』送受信。中間発表会と卒研提出後、ゼミ・コンパをする。卒業研究の指導にあたっては、学生の素朴な関心を大切に、参考図書の照会から貸借を積極的に行う。そのために、卒業研究に要する図書を研究費で購入する。歴史学に限定せず、ヨーロッパに関する事項なら、何でも取

り上げてもよいように、きめ細かく指導する。大事なのは、学生の素朴な関心を自由に引き出すことである。また、『学生の自主性に任せる』のではなく、1年間に亘って、個別ゼミ・草稿添削・完成へと、定期的に関講することが、肝心だ。そうした実質的な指導体制を取ることによって、学生が卒業研究を目指して、地道に論点を深め、そして口絵・地図・図版掲載の卒業研究を完成し、充実した大学生活を送ったことになる。懇切丁寧な、徹底した卒業研究指導を毎週、時間通り実施し、学生の関心を引き出すように、教員として最大限に努力するので、熱意のある学生の期待に大いに応えることが出来る。備考には、「『卒業研究を完成しよう！』。大学生活の集大成に相応しい、水準の高い卒業研究が完成し、大学で学ぶ醍醐味を実感するように、徹底した研究指導を貫く」と明記し、実質的な指導方針を打ち出し、学生の期待に十分に答える。

授業経過報告：欧米文化選修4年次11名が、前期は、3週ローテーションで、個別演習を行って来た。毎回、レジュメ作成を義務づけ、報告し、論点を深め、9月中旬以降は、毎週、日時を固定して、レジュメに基づく報告を義務づけた。隔週（前期）、毎週（後期）、個別演習を実施して、1年間に及ぶ実質的な卒業研究指導体制を堅持する。10月20日の中間発表会までに、編別構成を確定し、完璧な発表レジュメを完成させた。12月6日から、「卒業研究の作成要項」に基づいて、草稿作成に進む。1月下旬まで、「卒研草稿添削日程表」に従って、草稿提出・添削・修正と、週1回の添削ゼミに入り、1枚1000字で、120枚を目標に完成する。また、カラーの口絵、カラフルな画像の取り込みを勧め、コラム等も挿入させる。1月下旬、パソコンによる画像付きで清書し、2006年1月31日提出。2月、卒業研究の概要（5000字）と感想（1000字）を『西洋史』17号に掲載する。中間発表会後と1月卒研提出後、ゼミ・コンパを行う。このように、他の研究室以上に、1年間半あるいは2年間、演習とゼミで、卒業研究の準備を着実に積み重ねているので、卒業研究の作成はスムーズに進められる。不真面目ではないが、ゼミや草稿作成で、学生の研究姿勢に微妙な違いが目立ってきたのが、最近、少し気になる。

## おわりに

以上、今年度、開講してきたヨーロッパ史授業科目を、一つ一つ点検してきた。教養教育から専門教育への流れが、ほぼ無理なく、スムーズになっているのではないだろうか。大学教育において、双方の密なる連携は言うまでもない。さらに、授業科目の組み立てや内容及び実施においても、手前味噌だが、かなり成功している方ではないだろうか。学生の姿勢がどうであろうと、私は、一貫してこの方針を、迷うことなく堅持したい、と思っている。もちろん、今後とも、日々の教育実践から、大学教員としてのあり方、ひいては学生の意識変革が少しでもなされるように一層工夫していきたい、と思っているのは言うまでもない。

ヨーロッパ史授業科目の総点検を経て、最後に、次の4つの標語を掲げて、今後の方向を指摘しておこう。いずれも基本的なことで、全く再確認という意味である。

### ①「教養教育の組織化よりも、教育実践を！」

今、全国の大学で、教養教育の再組織化が進んでいる。「大学教育研究センター」とか「大学高等教育開発センター」とか、多種多様な名称を掲げて、その施設がスタートしている。しかも大学が競うように設置している。旧教養部の復活ではないだろうが、その実践的戦略の狙いは何だろう。それなりに意義があるのだろうが、それより、教養教育のあり方の問い直しは、大学教育の実践からスタートすべきである。大学に籍をおく教員が、専門を問わず、必ず教養教育の科目を、少なくとも一つ実際に担当し、その日々の教育実践から議論すべきである、と常々思っている。何よりも大事なものは、学生を前にしての日常的な教育実践である。

### ②「在学生を大切に！」

出前講座とか、社会人教育とか、大学が社会との連携を図る試み自体は、大いに歓迎されるべきであろう。欧米の大学から比べたら、こうした学外向けのサービスは明らかに遅れをとっていた。社会人入学やオープン・キャンパスなどは、同じ日本でも、西高東低のごとく、西日本の大学の方が早かったが、今や、全国どこでも、高校生への出前授業から社会人向けの公開講座まで、競うように実施されている。かなり遅きに期した嫌

いはあるが、これ自体は歓迎すべきだ。しかし、そうした外向けに積極的にサービスをしながら、あるいはそうだからこそ、実際に在学している学生には、それ以上の対応が求められる。何よりも授業やゼミを休講にしないことである。本来、学生あっての大学であることを、忘れてはならない。研究と教育が大学の両輪とすると、在学している学生に対するきめ細かな教育が疎かになっては、大学は意味をなさない。大学教育の軸になるのは、在学生への教育であることを、声を大にして強調しておきたい。在学生を大切にして、大学教育を効率よく行い、同時に、研究を続けることである。

#### ③「シラバスだけでなく、授業経過・実施報告も！」

シラバスの作成が一般化したのは、いつ頃であったろうか。確か、今から10年前であろう。シラバス書式にパソコンで打ち込むのに苦労したのを、昨日のように思い出す。年々、書式が整い、分かり易いシラバスになった。シラバスの利用の仕方は様々であろうが、それぞれの初回の授業で、科目のシラバスを学生に改めて配布して、その内容を周知徹底するのも、一つの方法ではないだろうか。授業の内容から、受講上の注意そして成績評価の方法について、学生と再確認してから、授業を開始する。さらにまた、シラバスはあくまでも計画に過ぎない。実際の授業をどのように進めたのか、あるいは終了した結果、その実績はどうだろうか。反省も込めて、科目ごとの「授業実施報告」や「授業経過報告」を何らかの形で公表することも可能ではないか。私は、毎年、『西洋史』（研究室論集）とHPの中で公表するようにしている。

#### ④「めげずに、毅然たる態度で！」

そして、最後に強調したいのは、学生がどうであれ、教員は、研究だけでなく、教育においても変わらぬ情熱を傾けることである。学部教育に情熱を持ち続ける。授業では、いつも安易に流れがちな学生に苦慮する。しかし、これには、めげずに、毅然たる態度で臨むのが、肝心だ。教員の一貫した姿勢を堅持することである。と同時に、学生に全面的に向き合い、最後まで面倒を見る。それは、講義や文献講読はもちろんのこと、ゼミや卒業研究の指導においても特に不可欠なことである。何度も書いてきたが、学生の「自主性に任せ

る」とは、学生を放任することではないか、といつも思っている。

#### 註

- (1) 「大学生の学習意欲と学力低下」については、『朝日新聞』2005年11月13日付け記事、参照。
- (2) 教養教育と専門教育の連携と大学教育の実例については、拙稿「大学教育におけるヨーロッパ史」『秋大史学』50号、2004年、参照。
- (3) 今年度の授業実施報告と授業経過報告については、教育文化学部国際言語文化課程欧米文化選修「斎藤研究室ホームページ (<http://cube.ed.akitau.ac.jp/staff/ysaito/index.html>)」、と『西洋史』（研究室論集）に公表している。
- (4) 「ヨーロッパ史」の内容と授業改善および学生による授業評価については、拙稿「スイス史をいかに教えるか—『ヨーロッパ史』の実例として—」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第4号、2002年、拙稿「『ヨーロッパ史』の授業改善」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第6号、2004年、参照。
- (5) ブリテン文化史については、拙稿「ブリタニカとヘルヴェティカー新しいヨーロッパ学を求めて—」『秋田大学総合基礎教育研究年報』第4集、1997年、拙稿「ヨーロッパ文化の『基底』にあるもの—イギリスとスイスを事例として—」『西洋史』第14号、2003年、参照。
- (6) 文献講読の意義と実践については、拙稿「大学教育における『文献講読』の効用—ヨーロッパ史理解への試み—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第24号、2002年、参照。
- (7) 「イギリス史文献講読」の実践と学生による授業評価については、拙稿「教養教育としての『イギリス史文献講読』」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第7号、2005年、参照。
- (8) 卒業研究とゼミについては、拙稿「ヨーロッパ史卒業研究指導の方法と実践—『卒業研究指導ゼミ』と『卒業研究ゼミ』を通して—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第24号、2002年、参照。また、船曳建夫『大学のエスノグラフィティ』有斐閣、2005年、がとても有益だ。